『入菩提行論』第九章 50 ～ 52 偈の解釈をめぐって

桜井 智浩

『入菩提行論』Bodhicaryāvatāra 現行本（BCA）第九章には、42 ～ 44 偈と 50 ～ 52 偈との二つの大乗仏説論争がある。後者は Prajñākaramati により偽撰と指摘され、また初期本との比較研究により初期本の論争と現行本の第一の論争に対する第二の論争の異質性が明らかにされた。この部分の bSod rnams rtse mo（1142-1182）、Bu ston Rin chen grub（1290-1364）の BCA 注釈書の了解を、インド撰述注釈書の影響に注意しつつ検討する。問題の三箇は次の通り（[]内は諸注釈の内容より補う）。

(50) もし、経に入っているその言葉を、仏の語られたものと認めるとすれば、大乗に関して、あなたの経典と大乗が等しい [から仏説であると] どうして考えられないのか。

(51) 理解されない部分において、[大乗] 全てが過失がある [とするならば、大乗に小乗に] 等しい一つの経典があることから、全てを仏説であるなどして [考えられな


特に論法に注目すると、大乗と小乗の平等性に基づき、大乗の仏説性を証明する 50, 51 偈に対し、「甚深」なる経典の理解という点から大乗の優越性を説く 52 偈という違いがある。これらを Pra が偽撰とする根拠は①「誤った配列で置かれたら」（apakramaniśvita）という三偈の配列位置、②そこから派生する「著者が主題に精通していないこと」（prastāvakauśala）という証明済みの問題の再証明という論争上の過失、③「稚拙」（aśītīla）な表現（Vaidya.ed., p.210, II.5-10, Der.224a3-6, Pek.251b8-252a4.）だが、50 偈、51 偈については、43 偈との内容重複を指摘する一方、52 偈のみを「稚拙」とする点は先述の論法の違いが関連すると考えられる。

これに対し、bSod rnams は三偈に注釈するが、50 偈の注釈（Ca306b3-4）で、偈の「経に入っている」という言葉を、「大般涅槃経」「大乗庄严経論」第一章に見られる「経に入っており、律に示され、法性と矛盾しない」という仏説の定義を

— 367 —
『入菩提行論』第九章 50 〜 52 偈の解釈をめぐって（桜 井） (163)

意図したものと捉えている。定義が論点のものは 51 偈でも同様だが、52 偈については別の詠文がたてられ、前二偈と異質性を彼の注釈でも確認できる。更に、Pra の指摘に対し、「最初の〔論争の〕広説とするならば、その過失はない。」(Ca307a2-3) とし、第二の論争の詳解と見る。

Bu ston の『入菩提行論注釈「菩提心を照明する月光」』Byang chub sems dpal spyod pa la 'jug pa'i 'grel pa : Byang chub kyi sems gsal bar byed pa zla ba'i'od zer は、50 〜 52 偈を 42 〜 44 偈の直後に続けて注釈される (Dza175a2-175b2) が、特に 50 偈の注釈（その中に初期本 33 偈に言及）は現行本へのインド注釈書の相当箇所より、寧ろ初期本注釈『解説細疏』Byang chub sems dpal'i spyod la'jug pa'i rnam par bshad pa'i dka' 'grel の初期本 33 偈直前の反論者からの論駁内容に一致する。

第二、言葉が経に入っており、律に示され、法性と矛盾しないその言葉を仏の語られた阿合を考えて、大乗はそう（阿合）ではない、阿合に聖（sic.）等があるって説いて、［それらの法我］大乗によって否定されるから、と言うならば、［という］この箇所で、『入（菩薩）行』九章本の注釈に、もしも、互いに云々の一偈（初期本 33 偈）があるが、梵本と他の注釈にはない。大乗である『十万頌般若経』が主経（*dharmīn, chos can）であり、説示する（経）言と言う帰結である。全ての点で等しくはなくても、大部分があなたの経と等しいと、[即ち] 経に入っており、律に示され、法性と矛盾しない、どうして認めないのか、[認めるべきで] あるからである。（Dza 175a2-5）もし、仏説であると確立するものが、「経に入っており、律に示され、定義に矛盾しない」ということであれば、大乗はそうではない、なぜかというならば、声聞乗の阿合ではなく、色が正に存在すると彼述べになっているが、大乗（の経典）では否定されているからである。したがって、[我々の] 経典と矛盾するから、仏説ではない、という（論駁を）想定して、もしも、互いに矛盾するというならば、と [アクシャヤマティは] 語るのである。（『解説細疏』SAITO, A [1993] ed. p. 75, II. 1-8）

彼も 50 偈の「経に入っており」を定義を意趣したものとして理解するが、定義に言及する『解説細疏』を依拠したことで、結果的には 50 偈 ab 句に初期本 33 偈の注釈と同内容の注釈をしているのである。初期本への言及も、この事情が関連しているものと思われる。彼は 50 偈 cd 句以降でも、先行注釈書の見解を参照しつつ、独自の見解を述べた上で論述問題を総括する。

この三偈が、インドの原本では、従って、空性を修習すべき (BCA 第九章 49 偈) という [偈の] 後にあることについては『大注』(BCAP) とヴィブーティ [チャンドラ] は“誰かによって挿入されたものである。経についての論争の句であるから、誤った配列で置かれているから、そしてマハーカーシャパ等は稚拙であるから、阿闍梨 [シャーンティデー
ビャヴローチャナ [ラクシタ] は“アニーは狮子座に座って前後の結びつきを考えず述べられた”と言う (zer) 他の三つの注釈は後の位置において注釈して、ゴク大師（ゴク・ロデンシュラブ）によっても除かれているが、チベットのある者（bod’ga’zhig）は前において理解されると考えている（Dza 175b2-4）

この中で言及されるインド撰述注釈書の内容は先行研究によって各々の論書の上で既に確認されているものと一致するが、zer を用いている点からも、この撰述問題に限れば Buston は Pra の主張に懐疑的である。また、同様の見解をもつ bSod rnam と異なり、Buston は「チベットのある者」の見解に従い、実際に仏師の配列を変更したものと考えられる。

以上のチベット撰述注釈書では、Pra の指摘から①②の問題は認識していたが、第一の論争の詳解と見る、或いは第一の論争の直後にずらすことで解決される一方、③は特に触れられず、専ら仏の位置を巡り Pra の指摘が否定的に考察されている。この Pra とチベットの注釈者の意見の相違は、更に彼らの間の仏説観の相違に由来することが、今回関連した 43 仏の注釈内容に窺われるので検討課題としたい。


〈キーワード〉 大乗仏説論争、プラジュニャーカラマティ、ソナム・ツェモ、ブトン、『入菩薩行論』

（大谷大学特別研究員）